

【論文】

『リア王の悲劇』の新構想 (2)  
—リアの王国をどうするか—

磯山 甚一\*

A New Design in *The Tragedy of King Lear* (2):  
What to do with Lear's kingdom?

ISOYAMA, Jinichi

要約：本論(1)に引き続き、Qテキストの『リア王の歴史劇』が作者自身による「改訂」を経てFテキストの『リア王の悲劇』が成立したとする立場から、その際にいかなる構想があったかを探る試みの第二段階である。

今回は登場人物がリアの「王国」に関してどのような意識を抱いているか、両テキストの違いを中心に考察する。結果として次のような「王国」に関わる意識が浮かび上がり、テキストの違いが明らかになる。リアの王国分割で彼の関心の中心は王国か、それとも自分の老いか。ケント伯の追放とエドガーの指名手配は両テキストどちらも王国に深くかかわる。コーディーリアが父親リアのために行動する目的は王位の復活か、リアの受けた不正義に対する復讐か。オールバニ公爵が関与するのは国際紛争としての戦争か、コーディーリアの率いる内乱の鎮圧か。最終的にこれらの違いをもたらす重要な要因が劇中で起きる戦争の性格の違いであると判明する。すなわち、フランス王国軍が侵攻する国際紛争としての戦争か、それともコーディーリアが率いる軍勢が引き起こす内乱としての戦争か。

キーワード：王国分割 戦争 内乱 侵略 復讐

---

\*いそやま じんいち 文教大学名誉教授

## はじめに

本論(1)において、Qテキスト(以下Qと略記)として伝わる『リア王の歴史劇』から、Fテキスト(F)の『リア王の悲劇』へと作者シェイクスピアによると考えられる「改訂」が加えられた過程において、一定の構想があったとみなされることを確認できたと思われる<sup>1)</sup>。すなわち、前者『リア王の歴史劇』において侵攻するフランス王国軍の存在が明らかであるのに対し、改訂の結果としての『リア王の悲劇』においては、台詞やト書きからフランス王国軍の存在に関する部分が削除されている、または、少なくとも一貫して削除しようとする意図が明らかである。

結果として、これら二つの戯曲において、コーディーリアが異なる役割を担うことになるだろう。最初の『リア王の歴史劇』において、コーディーリアは夫であるフランス国王の侵攻に伴ってかつての自分の王国に戻る。それに対して改訂結果としての『リア王の悲劇』のコーディーリアは、夫に許しを願い出てみずから故国に帰還し、集まった国内の不満分子の先頭に立って反乱軍を率いることになるだろう。少なくとも「改訂」の意図としてはそういうことになると考えられる。この反乱は『リア王の悲劇』すなわちFで‘this war’(第5幕第3場54行、以下「F,5.3,54」のように表記)として言及される。同じ語は『リア王の歴史劇』すなわちQでも第24場58行(以下、「Q,Sc.24,58」のように表記)で用いられる。このように同じ‘this war’と言及される戦いであっても、Qの『歴史劇』ではフランス王国軍が侵攻する「侵略戦争」である。その一方でFの『悲劇』の文脈では、今日ならば‘civil’を付けて言及する戦争、すなわち「内乱」ということになるだろう<sup>2)</sup>。

『歴史劇』から『悲劇』への「改訂」における個別の台詞の変更、削除、追加の詳細についてはそれぞれについてすでに多くの研究がなされて解釈や読み方が議論されている。それらの研究成果の詳細をできるだけ踏まえ、本論(1)における考察をもとにして、Qの『歴史劇』とFの『悲劇』がそれぞれ固有の「構想(design)」を備える、別個の戯曲であることを明らかに

したいと考える。

以下の本論 (2) では、これらの二つの戯曲において、「王国 (kingdom)」（または、state, country, realm, land, dominion が同じ意味で用いられる場合もある）が、登場人物によってどのように意識されているかを確認しつつ叙述を進めたい<sup>3)</sup>。

ここでひとつ注意しておきたいのは、固有名詞「ブリテン」という名称には慎重な取り扱いが必要なことである。今日の版本では、‘THE PERSONS OF THE PLAY’ (Stanley Wells 編, p.97) とか、‘LIST OF CHARACTERS’ (Jay L. Halio 編, p.94) のように、登場人物表が冒頭に添えられ、‘LEAR, King of Britain’ としてリアが「ブリテン王」であると説明される。しかしもとをただせば、1608年に出版されたクォート版 (Q)、1623年に出版されたフォリオ版 (F) とも、そのような人物表はつかない。しかも、QとF、どちらのテキストでも本文中に‘Britain’ という語は一度も用いられない。派生形としての‘British’ がQで三箇所、Fで二箇所用いられるのみである (Fでひとつ減るのは後で確認するとおり、Fの一回が‘English’ と修正されるため)。さらに、戯曲の全体を通じて、リアの「王国」のように何らかの「国」があるとの意識は明らかであるが、それが今日で言う確定された「領土」や「国土」を含むのかどうか、明らかではない<sup>4)</sup>。

## 1. 分割可能な「王国(kingdom)」

リア王の物語が始まるそもそもの発端となるのが、国王であるリアが娘たちに王国を譲ろうとして決意するいわゆる王国の分割である<sup>5)</sup>。リアがその分割を公に発表する直前、開幕冒頭で交わされるケント伯とグロスター伯の対話がある。二人の会話によれば、その後すぐ王自身によって発表されるはずの王国分割の案件について、王の周辺ですでに以前から噂があったことが明らかである。ケント伯はリアがコーンウォール公爵よりもオールバニ公爵がひいきのようだと述べ、分割がこれら二人の公爵に関わることを示唆する。後にリアは三つに分割すると宣言するが、開幕の時点の噂話

では二人の公爵の間の分割であり、リアの周辺では二分割とみなされているのである。話題となる二人の公爵がリアの娘たちの夫たちであることはまだ明かされない<sup>6)</sup>。

さて開幕冒頭の二人の対話で、ケント伯の問いかけに応じてグロスター伯が話を始める。その台詞から、分割に関するそもそもの認識がQとFで異なることが明らかである<sup>7)</sup>。

① Q the division of the kingdoms (Sc.1,3~4)

F the division of the kingdom (1.1,3~4)

Qでは‘kingdoms’と複数形が用いられ、Fでは単数形の‘kingdom’である。Qのグロスター伯は複数形の‘kingdoms’が二人の公爵の間で分割されると認識するのに対して、Fでは単数形の‘kingdom’が分割されると述べる。Qで用いられる複数形の‘kingdoms’の読みについては諸説がある。一つは、‘kingdom’の意味を‘kingly function, authority, or power’として読むことであり、これならば複数形で表わして分割可能なものとして理解できる<sup>8)</sup>。Qの複数形の‘kingdoms’の分割とは、単に地図上に線を引いて表わすような領土の細分化にとどまらないことになるだろう<sup>9)</sup>。もちろんリアは地図を取り出してそのような説明も行うのだが。

続けてグロスター伯が語る内容もQとFのテキストには相互に微妙な違いがある。

② Q for equalities are so weighed ... (Sc.1,5)

F for qualities are so weighed ... (1.1,5)

Qのグロスター伯は、その分割が二人の公爵の間の「平等性 (equalities)」に大変気をつけてバランスをとった (weighed=balanced) ので、周囲にはどちらが多い取り分になるかわからないほどであると言う。一方、Fテキストのグロスター伯は、「(二人の) 身分 (qualities)」が相互によく考慮されており [または、二人は互いに身分に違いがないと判断されたので]、どちらが多い取り分になるか決めかねる、とする<sup>10)</sup>。つまりQテキストでは、リアは両公爵の取り分が平等になるように何かと取り計らっている。しか

しFテキストでは、リアは両公爵の身分 (qualities) を勘案しようとするので [または、両者の身分に違いがないと判断したので]、どちらがどれくらい受け取るか、いまだに周囲にはわからない、という。QとFでは分割の基準について明らかな違いが認められる。ただし、ここには、分割はすでに事実上行われて発表を待つだけであり、側近のグロスター伯はその内容をあらかじめ知らされているとの暗示がある<sup>11)</sup>。

グロスター伯の台詞が伝えるところでは、Qのリアは分割において二人の公爵の「平等 (equalities)」を第一とし、両公爵を公平に扱おうとする。そういうQのリアには、社会的、公的な王の立場にある者として二人の公爵に対し配慮する様子が認められる。一方でFにおける両公爵の「身分 (qualities)」に相当するものは、どちらも公爵で、所領の規模や質、祖先に連なる一族の相対的地位、さらには個人の人柄や資質なども含まれるのであろう。いずれにせよ、Q、F、どちらのテキストでも、分割の基準となったそれらの語 (equalities, qualities) に公爵ら二人が接した場合、二人の間にリアの判断をめぐる異論は当然起こりうることとして、グロスター伯はここで話題にしていると考えられる。後で二人の公爵の間に紛争が起きそう、と噂が流れるという物語の進行になるからである。

やがてリアが登場し、自分の「これまで秘してきた計画を明らかにする (大場訳)」として、以下のように宣言する。以下の③、④、⑤はリアの連続の台詞であるが、説明の都合で分けて考えてみたい。リアはまず、

③ Q Meantime we will express our darker purposes. (Sc.1,36)

F Meantime we shall express our darker purpose. (1.1,31)

と前置きをして、続いて「王国を三つに分割した」と宣言する。

まずQとF共通であるが、リアは 'darker' として比較級の表現を用いる。開幕冒頭でケント伯とグロスター伯が王国分割を話題にしていたとおり、二人の公爵に分割が行われることは周囲にすでに知られていた。リアがここで比較級 'darker' を用いることにより、「知らせていない方の」=「これまで秘してきた」という意味になりうる。この比較級表現の使用で、知ら

されてきた二分割ではなく、知らされなかった計画を含めて、結果として三分割となることが明らかになるだろう<sup>12)</sup>。ここでリアが三分割 (divided / In three our kingdom) に言及することは、そこに集まった人々にサプライズになるであろう<sup>13)</sup>。

あるいは、開幕冒頭のケント伯とグロスター伯が知っていたのは二分割であったから、Fの‘darker purpose’はその分割の三番目そのものを指し示すかもしれない。Qは‘our darker purposes’[複数形で、諸計画]であるのに対して、Fは‘our darker purpose’[ひとつの計画]である。王国分割ともなれば、それに伴う決定事項は一般的に考えて多岐にわたることが予想されるから、「諸計画」と表現することがどちらかと言えば妥当であろう。もちろん「計画」でもそこにさまざまな内容を含むと理解しうるが、わざわざQの複数形からFで単数形に修正したとすれば、Fにおいてリアの心が何か一つの「計画」に集中している（または、心を奪われている）ことを表わすのではないか。しかもそれは「知らせてない方の (darker)」計画を指すとも読める。三番目のコーディネリアに対する計画にFのリアの心は奪われているかもしれない。

リアは続けて「三分割」に伴い実施すべき自分のQ「差し迫って果たすべき決意 (our first intent)」、F「固い決意 (our fast intent)」を述べる。

④ Q and 'tis our first intent (Sc.1. 38)

F and 'tis our fast intent (1.1,33)

先に見たとおり、Qの場合はリアに「諸計画」があるわけだから、それらのうち差し迫って果たすべき最初の (first) 決意があることになるが、Fの場合はリアが一つの計画に気持が集中して、それだけに固執していることになろう<sup>14)</sup>。

その決意とは何か、続く To～以下のQで二行、Fで三行で宣言される。

⑤ Q To shake all cares and business off our state,

Confirming them on younger years. (Sc.1.39～40)

F To shake all cares and business from our age,

Conferring them on younger strengths, while we

Unburdened crawl toward death... (1.1,34~36)

Qでは「余の王の地位 (our state) から随伴する一切の関心事と職務を振りほどき、若い年代の者たち (younger years) のものとして正式に手続きをする」であるのに対して、Fでは微妙に異なり、「老齢の肩からもろもろの心労、責務を振りほどいて、その一切を若い力に委ねる」(大場訳)となる。Qにおける‘state’はWellsの注 (p.102)によれば‘(physical) condition, status, high rank’とあり、「身体の調子」と同時に「王の身分、高い地位」をも意味しうる。「自分の王の身体にそなわる地位 (our state)」から、それに伴う「一切の関心事と職務 (all cares and business)」を振り払い (shake…off)、それらをもっと若い者たちのものとして「正式に手続きをする (confirming)」となるだろう。かくしてQのリアは、自分が「王の身体にそなわる高い地位」にあり、王国の「関心事と職務」に責務を負う自分の自覚を述べ、それらを振り払う (= 責務の実際を自分が今後は行わない) ことが自分の決意 (intent) だという。ということは、その「自分の王の身体にそなわる地位 (our state)」は温存することを暗示する。

他方Fでは、「老齢の肩から (from our age)」「もろもろの心労、責務を振りほどいて、その一切を若い力に委ねる (conferring)」である。ここには、Qのリアの意識に認められた‘state’ (= 自分の王の身体にそなわる高い地位) に対する自覚が抜けており、Fのリアにとって自分の「老い」が何よりの関心事なのだ。そしてQにはない一行「死への旅路をよろよろ歩く」さえも付け加えて念を押す。そのためかどうか、Fのリアは‘state’に関連する事項を公に表明するのを忘れたことに気づいたのであろうか、それを後であわてて付け加える (44~45行)。すなわち、Qには存在せず、Fでわざわざ ( ) で囲まれた次の文言である。

⑥ Q -----

F (Since now we will divest us both of rule, /Interest of territory, cares of state) (1.1,44~5)

(「王国の統治権、領土の所有権、政務の諸配慮を…脱ぎ捨てるぞ」)(大場訳)

と、二行を括弧( )付きでFで付け加える。Fに表記される括弧( )そのものが1623年のフォリオ版テキストに実際に印刷されている<sup>15)</sup>。この括弧内で語られる内容は直前に発した‘Tell me, my daughters,’と直接のつながりがない。それゆえテキスト上で視覚的に明確にするために必要とされたFの括弧( )であろう。Fのリアは娘たちの誰が自分を一番愛しているか、答えるよう娘たちに指示しようとした途端、ふと心によぎったことを突然付け加えたように見える。Fのリアは、自分が公的に王位にある身だという意識がQよりも薄れている、と解釈していいだろう。

なお、ここに現れるQの‘Confirm’からFの‘Confer’への変更も、意図的に一貫して修正されたことが明らかである。Qの‘Confirm’はFの‘Confer’と比較して、その行為が公式的、法的なものとして行われること (legally establishing) を暗示する<sup>16)</sup>。この修正に呼応して、少し後でリーガンに対するリアの台詞であるQの‘confirmed’ (76行)も、Fにおいて‘conferred’ (77行)と修正される。

続いてリアはコーディーリアに呼びかけ、Qでは「諸計画 (purposes)」のうちのひとつであるが、Fでは「これまで秘してきた計画 (purpose)」そのものとも受け取れることを発表する。開幕冒頭のケント伯とグロスター伯とのやりとりから分かるとおり、オールバニ公爵とコーンウォル公爵の間の分割そのものはQとFのどちらも「秘した計画」ではなかった。

実際に秘してきた三番目はリア自身が‘a third more opulent/ Than your sisters’ (Q, Sc.1, 78~9, F.1.1, 81) (姉たちよりももっと豊かな三番目)と自分でも述べ、最初の二つを凌駕する豊かな (more opulent) 贈り物が含まれると示唆される。リアが後から口外するとおり、リアは「コーディーリアをいちばん愛し、老後のすべての安らぎは親思いのこいつのいたわりの手に賭ける気でおった (Q, Sc.1, 114~5, F.1.1, 117~8) (大場訳)」というのである。ところがコーディーリアの反応は、どうやら父親の期待と全く異なる



る。コーディーリアの答え (Nothing.) に対するリアの怒りがやがて頂点に達すると、その末娘は親子の縁を切られ、自分に贈られるはずであったらう三番目は失われる。それはゴネリルとリーガンの取り分に加えるようにと、姉二人の夫達にリア自身からその場で指示が出される。ただし二人の間でどのように分配するか指示はなく、後に二人の間に「戦争になるかもしれないという噂 (Q, Sc.6, 10~11, F, 2.1.10~11)」、「不和が生じているのです (Q, Sc.8, 18~21, F, 3.1, 11~13) へとつながるであろう。

かくて王国分割の儀式がリア王自身も周囲も予期しない結果を招いて終了する。この時点からコーディーリアがフランス王と結婚することになってその場を立ち去るまで、その間でQテキストとFテキストの違いを含めて「国」についての登場人物の意識を整理してみよう。

QとFの大きな違いが、ケント伯がリアを諫めるために言い放つ台詞に二回ある。

- ⑧ Q ‘Reverse thy doom.’ (Sc.1. 140) (「宣告を撤回してください) )  
F ‘Reserve thy state.’ (1.1,143) (「王の地位は自分にとどめてください) ) (「王国」(大場)もあり)
- ⑨ Q ‘Revoke thy doom.’ (Sc.1,154) (「宣告を取り消してください) )  
F ‘Revoke thy gift.’ (1.1,158) (「贈与を取り消してください) )

Fテキストの台詞⑧にある‘state’は、Qテキストでリア自身が用いる語と同じであり、Fのケントはその語を用いて進言していることになる。すなわちQのリアは、王国分割の最初に取り組む決意として開口一番、自分の「王の地位 (state)」から「随伴する一切の関心事と職務を振りほど」くことだと述べる。この台詞によって、Qのリアがみずからの国王の身分と高い地位を意識していることを表わす、としてすでに確認した。Qのケントはリアにその意識があることを前提としているので、王国に関わる進言はあえて省くことにして、‘state’には言及せずに‘Reverse thy doom.’と述べ、コーディーリアに対する宣告に絞って取り消すよう進言すると考えられる。

さらにQのケントは少し後の⑨の進言でも、‘Revoke thy doom.’と前とほぼ同じ意味の台詞を繰り返してリアを諫め、王国は話題にしない。二回とも、コーディネリアに対するリアの宣告に的が絞られており、その末娘に対する宣告の撤回を求める。というのも、Qにおいてリアの意識には、王国や王の地位に関わる意識が明確であるから、あえて王国に関する懸念はその場で伝える必要がない、とケント伯は判断するからであろう。

それに対してFにおけるリアの関心事は、確認したとおり、まずもって‘our age’である。すなわち、‘To shake all cares and business from our age’（「老齡の肩からもろもろの心労、責務を振りほどいて」と宣言し、Fのみの台詞で‘crawl toward death’（「死への旅路をよろよろ歩く」）と付け加え、‘rule, / Interest of territory, cares of state’（「王国の統治権、領土の所有権、政務の諸配慮」）、「それらをすべて脱ぎ捨てるぞ」と続ける。

Fのケントは、そのようなFのリアをその時点まで目の前で見続けてきた結果として、リアの「決意‘intent’」がリア自身の「老い（age）」や「死（death）」に関わる一点に集中していることを見抜いている。その結果として、‘Reserve thy state.’（「王の地位は自分にとどめてください」と進言する。ここの文言は、Qテキストでは、コーディネリアに対する宣告を取り消すべきとする別の内容の進言であるが、Fでは王国に関する進言に修正されている。⑨の修正もそれと同じく、Qにおいてコーディネリアへの宣告の取り消しを求める‘Revoke thy doom.’であったものが、Fでは姉二人に対して行われた「贈与」の行為そのものの取り消しを求める内容の、‘Revoke thy gift.’（「どうか贈与のお取り消しを」（大場訳）に修正された。どちらも、リアが自分の王国をリア自身のものとして維持すべきである、という趣旨の進言である。

## 2. リアの「王国」意識のゆくえ

ではQとF、それぞれのテキストにおいて、その後のリアは自分の王国についてどういう意識を持つだろうか？

Q、Fどちらも、分割の儀式ののちリアは上の娘ゴネリルの居所に滞在する。しかし二週間もたたないうちに (within a fortnight) (Q.Sc.4,286, F.1.4,250)、娘の自分の扱いに不審を抱くようになる。やがてリアは二人の娘たち (ゴネリルとリーガン) との軋轢を経るうち、正気を失うところまで追い詰められる。その経過のなかでも、リア自身の口から一時的に自分の地位や王国に関する意識が表出されることがある。QのSc.6以降、Fでは第2幕以降その意識をリアが表現するのは以下のとおりで、微妙な差はあるがほぼQ、Fで共通である。

- ◎ Q ‘The King would speak with Cornwall,..’ (Sc.7,263)
- F ‘The king would speak with Cornwall,..’ (2.4. 94)
- ◎ Q ‘Death on my state.’ (Sc.7,273)
- F ‘Death on my state!’ (2.4,105)
- ◎ Q ‘Thy half of the kingdom hast thou not forgot,..’ (Sc.7,337)
- F ‘Thy half o’th kingdom hast thou not forgot’ (2.4,173)

この後でリアは ‘I shall go mad.’ (Q.Sc.7,444) (F.2.4,275) と言い放ち、自分が正気を失うかもしれないとの予感を表現しつつ退場する。その後の場面に姿を現すと、こんどは吹き荒れる嵐に向かって

- ◎ ‘I never gave you kingdom,..’ (Q Sc.9,17) (F,3,2,16)

と叫ぶ台詞があり、これがリアの自分の王国についての最後の言及である。リアの王位と王国についての意識の表出はかくて、QではこのSc.9、そしてFでは3.2で終わる。やがてQでSc.11、Fで3.4にその正気が失われたことにケント伯とグロスター伯から言及がある。‘Kent: His wits begin to unsettle.’ (Q,Sc.11,147) , ‘KENT: His wits begin t’unsettle.’ F,3,4,146)、および ‘Gloucester: Thou sayst the King grows mad.’ (Q,Sc.11.150), ‘GLOUCESTER: Thou sayst the king grows mad.’ F,3,4,149)。正気を失ったリアには、王国がどうなっているかなどの意識があるはずもない。この事実は後で、Fにおけるコーディーリアの帰国の動機と深く関連してくるだろう。

### 3. ケントの追放とエドガーの指名手配

そうしたリアの正気喪失の過程で、リア自身の「王国」、「王位」の意識は失われるが、その意識はいかにつながれていくか？実際のところ、続いてその意識を観客にもたらすのは、追放されるケント伯であり、指名手配されるエドガーであることを指摘したい。

#### ・ケントの追放

まずケント伯について。伯はリアが王として口頭で発する刑の執行によって、その王国から「追放 (banishment)」(Q,Sc.1,170, F,1.1,175 他類出)される。具体的には、Qで4日、Fで5日の猶予を与えられ、Qで5日目、Fで6日目には‘our [Lear’s] kingdom’ (Q,Sc.1.165, F.1.1,179)に背を向けよと命じられ、Qで次の日、Fで10日目にケントの身体がリアの言葉で‘our dominions’内で見つかった場合それは死を意味する、という<sup>17)</sup>。理由は、リアに「誓いを破れと追った」こと、リアの「宣告と実施の間に立ちほだかる」挙に出たこと(大場訳)である。そのように追放されたにもかかわらず、伯はすぐに変装してリアの眼前に戻ってくる。そのことが皮肉にも王国の存在を観客に思い起こさせる<sup>18)</sup>。刑罰とは理念上——とくに追放のような刑罰は——何よりも、「国」または「王国」、あるいは「領地」「領土」「都市」など、一定の地理的な領域を暗示する(注3参照)。「追放」では、その人物は何らかの境界で区切られた物理的な枠から強制的に外に排除されるから、リアの王国に当然ながらそういう境界が存在し、出入りを監視、警備するための要員がいることを暗示するだろう<sup>19)</sup>。さらに、リアによるケントの追放処分はリアの王国の制度や掟など法にもとづく処分でなく、怒りという感情に引きずられて自分の権力を行使し、その場でただちに刑罰として執行される<sup>20)</sup>。

その追放処分を受けたあと、ケント伯は観客にも理由を告げないまま変装して(‘I razed my likeness.’ Q.Sc.4. 4, F.1.4,4)リアの面前に再び姿を現し、リアに仕えることを申し出て許される。そうしてリアと行動を共にする間

も、観客は変装上の名前(ケイアス‘Caius’)はこの時点で知らされないで、ケント伯としか意識されない。リアとケントのそれまでの関係が変装にもかかわらず持続しているかのように意識されるであろう。自分がケント伯と明かせばその内部にとどまることを許されないはずなのに、そのリアの「王国」に言及する役目を負っている。ケント伯は続いて、コーンウォール公爵によって足枷に掛けられて拘束されてから、コーディーリアから届いた手紙を読んでみせる。コーディーリアへの言及自体、その結婚相手が別の王国の国王であることを思い起こさせる。さらにケント伯は王国分割後の現在の自分の周囲の状況を指しているのか、あるいはリアの王国を指しているのか、‘this enormous state’(Q.Sc.7.162, F.2.2,152)と口にする。「混乱の埒塙」(大場訳)など乱れた「状態」とみなすのが通例であるが、上でも見てきたとおり‘state’には「国」の意味もあり、国の乱れへの暗示が読み取れる<sup>21)</sup>。

このようにして、リアが王国を姉二人とその夫たちに譲ったのち、どちらが王国の権力を握ったかは何の言及もないまま、リアの王国が混乱に陥っていることがケント伯によって示唆される。一方でいまではフランス王国の後の地位にある末娘コーディーリアがケント伯に手紙を送っていたことが判明する。別の王国へと身柄を移した末の娘がこれからいったいどのように関わるのか、王国と王国の間のいわば「国際関係」が入り込むことによって、この物語はより一層複雑化するかもしれない。国際関係が入り込めば、王国内部にも影響が及ぶはずである。そのように観客の意識を向けさせるのがケントの台詞である。ケントの言い方はひどく曖昧であるが、異国の地にいるその女性が‘losses’(喪失)に対して‘remedies’(「癒しの手立て」(大場訳))を考えてくれるだろう、と締めくくる。リアの三番目の娘が最初の場面で別の王国の王とともに姿を消したことの意味がやがて明らかになるだろうという暗示である。

#### ・ エドガーの手配と変装

さらには、エドガーの存在もケント伯の場合と同じ作用をするだろう。

エドガーの指名手配の布告までの成り行きは、観客に明確に理解できる。彼は腹違いの兄弟のうちの兄で、その弟にあたるエドモンドが父親グロスター伯を欺いて策略を実行し、兄のエドガーはその犠牲者である。父親のグロスター伯の明言するところによれば、息子に対する布告はコーンウォール公爵の権限によって公布される（‘By his [duke’s] authority I will proclaim it.’ (Q.Sc.6,60, F.2.1.59) ‘The duke must grant me that.’ (Q.Sc.6,81,F.2.1.80)）。この場合もリアのケント追放の場合と同じように、父親がその場でただちに実施する、私人の意志による判決と刑の執行である。その布告の内容は、グロスター伯が自分で語るところでは、エドガーは国内 (in this land) にとどまれば逮捕されるはずだという（‘Not in this land shall he remain uncaught.’ Q.Sc.6,57, F.2.1,56）。グロスターの言うこの ‘land’ が、王国全体におよぶものであることがすぐに明らかになる（‘all the kingdom’ Q.Sc.6.82, F.2.1.81）。この「王国」はリアの王国と考えざるをえないため、コーンウォール公爵の権限がリアの王国全土に及ぶとグロスター伯は言っていることになる。伯はまた、「すべての港を閉ざし、悪党を逃がさない」（‘All ports I’ll bar. The villain shall not scape.’ (Q.Sc.6,80, F.2.1,79)）とも宣言する。この ‘ports’ は「城塞都市の門（城門）」という意味もあるが、手配の範囲がグレートブリテン島のような島の全体とすれば、「港」を意味するであろう<sup>22)</sup>。

グロスター伯はコーンウォール公爵を「わしの主君、わしの最大の後ろ盾たる公爵どの」（大場訳）‘The noble duke my master,/ My worthy arch and patron,’ (Q.Sc.5,58~59, F.2,1,58~59) と呼び、公爵に対して何らかの臣従の関係にあることが窺われる。上述のとおりグロスター伯がエドガーの手配を布告する際に、コーンウォール公爵の権限 (authority) を持ち出すのはそのためであろう<sup>23)</sup>。

エドガーはこのようにして手配を受け、手配の及ぶ範囲は ‘all the kingdom’ とされるだけで地理的に明確でないが、ともかく父親の目の届く範囲にいれば逮捕される。ケント伯の場合は追放処分のあと、変装で本来の身分を隠して再びリアと接触可能になる。エドガーの場合はさらに事

情が複雑になる。変装はケント伯と同じであるが、変装した姿もまた周囲から疎外される姿なのだから。彼は自分で「狂人の姿に身をやつす」(‘to shift /Into a madman’s rags’ (Q,Sc.24,183~4, F,5.3,177~8) ことにしたと後で振り返って述べる。すなわち ‘Bedlam beggars’ (Q, F両方で用いられる)の姿である。「ベドラム」という施設に収容されると、その人物はある特定区域内に生存しながら、かつその区域内の日常から排斥される身分となることを意味する<sup>24)</sup>。エドガーは自分で ‘The country gives me proof and precedent/ Of Bedlam beggars’ (Q,Sc.7,178~9, F,2.3.13~14) と、「この地 (the country)」にそういう「ベドラム乞食 (Bedlam beggars)」が存在するという。すなわち、人を「ベドラム乞食」と認定して特別扱いする何かしらの政府組織があることが暗示される。その組織の管轄区域は「王国」全体かもしれないし、あるいはロンドン市などの都市のように、国よりも狭く限定される地域かもしれないが、そのように認定された人々は、物理的にはその地域の枠の内側にいても、法的にその枠内に属さない人間としての扱いを受けるだろう。ここでも観客は ‘country’ という語から、何らかの限定された地域を意識するだろう<sup>25)</sup>。

以上、ケントの追放とエドガーの手配がリアの王国とどう関連するかについては、QとFの間に台詞の大きな違いは見出せない。二人ともに、追放と手配という違いはあるが、懲罰的命令によって物理的または法的に「王国」の枠外に排斥された人物となる。それがかえって「王国」を意識させることを確認したが、この劇中においてその王国そのものの範囲が曖昧で定義が困難であることにもなる。というのも、二人ともにその「王国」の外に出ることを命令されながら、その国の内部にすることが実質的に可能であることが明らかだからである。

変装は演劇上の約束事であって、変装をした上で起こる劇中の出来事を現実の水準の出来事と同次元で判断することはできないであろう。二人は変装しているものの、観客をあざむいて別の人物として登場するわけではない。観客は変装の事実を知らされているので、外見上は異なるものの同

一の人物として観客に意識される。変装したケントがリアに尽くしていれば、観客は変装姿の裏にケントを見るだろう。それどころか、ケント伯の忠誠心の強さを一層増幅させて意識するだろう。さらに、トム(=変装したエドガー)が精神病患者として奇妙な振舞いをして、その行動が父親に尽くす姿であるとするをまったく妨げない。かえってその変装した外面と内面の間にある落差の存在によって、観客が感情を移入できる空間が生まれているともいえるだろう。

#### 4. コーディーリア

コーディーリアの場合も上述のケント伯とエドガーと同じように排斥されて父リアの王国を去り、フランスで王妃となる<sup>26)</sup>。一国の後の地位にあるコーディーリアがもしも別の王国を相手に何か自国の軍事力を用いる行動を起こすとすれば、同国によるその他国への侵略行為となる可能性がある。本論(1)で確認したとおり、シェイクスピアの材源となったリア王の物語(Monmouth, Holinshed, *King Leir*)はどれも、フランス王とその後(コーディーリアにあたる女性)に率いられたフランス王国軍がリアの王位を回復するために侵攻する物語であり、それらの後はまさに侵略行為に加担している。ただし、それらはどれもそのコーディーリア側の視点から作られた物語であり、侵略が正当化されることはいうまでもない。

途中までそれら先行する物語の進行に沿って作られているのが本論(1)で見たとおりQの『リア王の歴史劇』である。Qでは、フランス王に率いられたフランス王国軍がリアの王国内に侵攻する。かつて父親のリアに勘当を言い渡されてその地を去ったコーディーリアが、夫のフランス王とともに故国に帰還し、フランス王国の後として再登場する。背後にはフランス王国軍が控える。しかしその国王がフランス国内の緊急事態に対応すべく帰国を余儀なくされ、王の代わりに「ラファー将軍」が王国軍を率い、そこから先行の物語と異なる展開になる。Qでは「後の軍隊(her army)(Q, Sc. 20, 207)」という言い方もされるとおり、コーディーリア自身も王国



軍の軍勢の一部を率いる (Fにも同じ ‘her army’ という言い方が用いられる (F,4.5,207) が、Fで暗示されるのは、後で見るとおり、別の性格をもつ軍勢である)。

再登場の際のコーディーリアの次の台詞は、Q、Fで共通であり、そこにはいない父親のリアに向けて発する台詞として、

⑫ Q It is thy business that I go about. (Sc.18,25)

F It is thy business that I go about. (4.3,24)

である<sup>27)</sup>。まったく同じ台詞であるが、意味するところがQとFで違いがあることを確認してみよう。話者コーディーリアが呼びかける ‘thy’ はQ、Fともにリアを指示する代名詞であるが、Qの場合は侵攻するフランス王国軍を背景に后が発する台詞であることを考慮するならば、第一義的には (父親としてよりは) 国王としてのリアを暗示するであろう。フランス王国軍が他国の領土に侵攻、その国の王位を奪取しかつての国王リアの王位回復を目的に国際紛争=戦争を引き起こしている。このようにQでは、フランス王国軍が侵攻して戦争が引き起こされる以上、侵攻を受ける側の軍の指揮官が誰かなど、攻撃を受ける王国の置かれた状況が深く関心と呼び、観客はどちらにくみするにせよ国についての意識は最大限に高まるであろう。

しかしFの場合は事情が大きく異なる。本論 (1) で論じたとおり、Fのコーディーリアは上陸してはいるものの、フランス王国軍は侵攻していない、あるいは、侵攻していないことにする「修正」の意図が明らかであった。その修正に応じて、コーディーリアの台詞も行為も、Fに沿った理解が必要であろう (Fのコーディーリアの言う ‘thy business’ が父親個人であることは後に確認する)。

コーディーリアの再登場までの進行を追ってみると、Q,Sc.13,84, F,3.6,47でグロスター伯がケント伯にリアをドーヴァーに連れていくよう要請し、続く場面のQ,Sc.14,13~17, F,3.7,15~19でリアがドーヴァーへ向かったとの報告がある。QとFで同じ台詞であるとしても、Qでドーヴァーにいる「武装した味方 (well-armed friends) (Q,Sc.14,17, F,3.7,19)」は明らかにフラ

ンス王国軍であるが、Fで同じくそこに駐屯しているとされる「武装した味方」は、コーディーリアを中心として集合しているが、フランス王国軍ではない兵力であろう。

その「武装した味方」が、Fでは後にコーディーリアに率いられて「兵士たち (Soldiers)」として登場する。Fテキストの第4幕第3場の冒頭のト書きは次のとおりで、明らかにQと異なる。

⑬ Q *Enter Queen Cordelia, a Doctor, and others* (Sc.18)

F *Enter with drum and colours, CORDELIA, GENTLEMAN, and Soldiers* (4.3)

Qで登場するのは兵士たちではなく、「その他の人々 (others)」であるが、Fでは「兵士たち (Soldiers)」が登場する。これによってFではコーディーリアが軍を率いている暗示があるとされている<sup>28)</sup>。その一方でQのコーディーリアは、フランス王国軍の本体と少し離れて行動していることになろう。さらにこのト書きでQの「医師 (a Doctor)」が、Fで「紳士 (GENTLEMAN)」に修正されるのも、その場が「殺伐たる戦場」<sup>29)</sup>であることを表わすための修正であるとされ、Fのコーディーリアはみずから戦闘が行われる場面に乗り込んでいる。やがて両軍の戦闘開始間近の場面が変わり、QでSc.22、Fで5.1になると、コーディーリアがリアと合流したことが伝えられ ('the King is come to his daughter')、オールバニ公爵によれば、「わが国の圧制 ('the rigour of our state')」に声をあげた者たちも、そのリアに合流したと伝えられる。

そのQでSc.22、Fで5.1の場面で報告される情報では、Fのコーディーリアの軍勢はQと異なり小規模のものであるかもしれないと解釈できる台詞が出てくる。すでにオールバニ公爵が自分の陣営に陣取り、いよいよ戦闘の火蓋が切られようとする時点で、敵軍の規模に関する情報が公爵のもとに届く。

⑭ Q Here is the guess of their great strength and forces

「相手方の強大な戦力と兵力の見積もり」(Sc.22,56)

F Here is the guess of their true strength and forces

「相手方の本当の戦力と兵力の見積もり」(5.1.41)

Qのフランス国王軍は「強大な (great)」戦力で迫っているが、Fのコーディーリアが率いる軍勢が強大かどうかを表わす語はなく、「本当の (true)」戦力に関する情報であるとされる。QからFへのこの修正には、Fのコーディーリアの軍勢はさほど大きな戦力ではないという暗示があるだろう。Fにおいてコーディーリアは、確かに夫であるフランス王の許しを得ているかもしれないが、実際にオールバニ公爵の軍勢に正面から立ち向かうだけの勢力を集めることはできていない、と。

これに呼応するように、続く両軍の戦闘場面 (Q, Sc.23, F, 5.2) でコーディーリアの軍が舞台上に登場する際のト書きがQとFで異なる。

⑰ Q Alarum. The powers of France pass over the stage 「led by」  
Queen Cordelia with her father in her hand. (Sc.23)

F *Alarum within. Enter with drum and colours, LEAR, CORDELIA, and Soldiers, over the stage, and exeunt* (5.2)

軍の規模を表わすと思われる表現としては、Qテキストの「フランスの軍勢 (The powers of France)」に対して、Fテキストは単に「兵士たち (*Soldiers*)」と指定があるのみである。これらに対比させれば、Fテキストが大きな兵力を暗示しないことは明らかであろう。

このト書きに続く場面は台詞が少なく、両軍の戦闘の様が「黙劇の演出」<sup>30)</sup>で演じられる。さらに次の場面はこの芝居の最後の場面となるQで Sc.24、Fで5.3である。その場面の初めで、すでに勝敗が決した様子である。コーディーリアとリアは捕虜となり、エドマンズの指示でどこかに連行される。エドマンズはリアとコーディーリア父子を自分の判断で別の場所に幽閉したことにつき、続いて登場するオールバニ公爵に釈明する。エドマンズが述べるその理由の趣旨は、老齢の王とその娘の姿を一般の人々 (the common bosom) に見せれば、その‘charms’ (人の好意を生みだす力) によって人々の心を引き寄せ、自分たちつまり自分とオールバニ公爵の側に対す

る反感を誘い、一般の人々の反乱を招く、ということである。「反乱」という言葉は用いられないが、その台詞の核心は、自分たちに対して人々が起こす反乱の可能性に対する警戒である<sup>31)</sup>。その台詞には、勝利で決着がついた直前の戦闘をどう位置づけるかについて、QとFで重要な違いが出現する。その違いはQからFへの些細な修正に見えるかもしれないが、決して見逃しえない暗示がある。

⑱ Q Whose [Lear's] age has charms in it, whose [Lear's] title more,  
To pluck the common bosom on his side,.. (Sc.24,47~48)

「リアの老齢には人を魅する力があり、王位にはもっとある。  
民衆の心をたちまち味方へと引き込みましょう。」

F Whose [Lear's] age had charms in it, whose [Lear's] title more,  
To pluck the common bosom on his side,.. (5.3,47~48)

「リアの老齢には人を魅する力があった、王位にはもっとあつた。  
民衆の心をたちまち味方へと引き込んだのです。」

続けてエドモンドはコーディーリアも「まったく同じ理由」によりリアと同じ処遇をしたと付け加える。

つまり、動詞が現在形か過去形か、ということである。しかし、この違いは大きな意味をもつだろう。Qの現在形‘has’の場合、オールバニ公爵らの軍勢はフランス軍との戦闘は勝利で終えたものの、リアとその娘コーディーリアは捕虜となった現在も人々を引き寄せる「魅力 (charms)」をそなえており、これから内乱が起りかねない、だから幽閉する、ということである。これに対してFで用いられる過去形‘had’は過去の事実の認識を述べる。戦闘の前にリアはその「魅力」をそなえていたので、人々 (the common bosom) がリアを支持して内乱が起きた、と言っている。つまり、Fにおいてたった今終えたばかりの戦闘は、リアとコーディーリアが先頭に立って蜂起した「内乱」の鎮圧であった。リアの「老齢」と「王位」の魅力は人々の心を引き込んで内乱が起きたが、それはすでに鎮圧されて過去のものになった、だから‘had’という過去形なのである。

この台詞を聞いて、Q、Fともにオールバニ公爵はエドモンドに言葉を返し、たった今終わった戦闘を「この戦争 (this war)」(Q, Sc.24, 59, F, 5.3, 54) として言及する。Qにおいてそれはひとつの国 (フランス王国) が他の国 (かつてのリアの王国) に侵攻して起こる国際紛争としての「戦争」である。この語はFテキストでも同じ「この戦争 (this war)」として用いられるが、上述のようにFテキストの文脈では「内乱 (civil war)」とみなすことが妥当であろう<sup>32)</sup>。

以上のように考えれば、フランスから帰国して再登場する際のコーディーリアの台詞 (⑫で示した ‘It is thy business that I go about.’) は、QとFで別の意味を帯びるであろう。Fでは、フランス王も遠征に加わっていないし、フランス王国軍も侵攻していない。母国で圧政に反乱を起こした軍勢を、コーディーリアが率いている。父親であるリアは同時に国王であったから、もちろん結果としてその王国も関わることになるだろうが、Fでコーディーリアの言う ‘thy business’ とは、第一義的にはリアが自分の地位を追われたことに対する、末の娘による「復讐」との見方が成り立つであろう。Fにおける ‘thy business’ の ‘thy’ は、第一義的に父親としてのリアを指示する代名詞となるだろう。

確かにリア自身が狂気に陥る前に二人の娘たちに向かって「復讐」の語を叫んでいる。Fの第2幕第4場272行 (QではSc.7, 439) でリアが叫ぶ、 ‘I will have such revenges on you both.’ である。ここで ‘you both’ として指示されるのはゴネリルとリーガンの二人である。リアは自分に対する何かしらの不正義が娘二人によって行われたと認識するのであれば、復讐はそのリア本人が当然自分の行為 (my business) として行うであろう。ヨーロッパ中世の環境において復讐は権利であり、また義務でもあったという。だが、コーディーリアが来たときリアはすでに正気を失っている。先ほどの ‘revenge’ を叫ぶ台詞の直後にリアが ‘O fool, I shall go mad.’ と自分でその不安を表わす台詞があり、Q, Sc.11, 147, F, 3.4.146でケント伯が「(王は) 気が変になりかけておられる (His wits begin to unsettle.)」と言い、続けて

グロスター伯が「お前はいま王が狂いそうだとやった (Thou sayst the King grows mad:;)」(大場訳)と受けとめる。だとすれば、リアは一人の人格として自分の復讐を行う資格に欠けることになり、復讐を実行する権利と義務を代行して負うのは誰か近親の者であろう。コーディーリア自身は「復讐」を口にすることはないが、リアの近親者といえ、三人の娘、そして姻戚としてその夫たちだけである<sup>33)</sup>。

リアが開幕冒頭の場面でコーディーリアを勘当する際に言い放った台詞がここで反響する。リアが口にしたのは、コーディーリアと自分との‘Propinquity and property of blood’ (血のつながりと血の同一性) (Q, Sc. 1, 106, F, 1.1, 108) を否認することであった。この台詞が痛烈な皮肉を帯びる。コーディーリアは父リアが自分に対して否認したもの——血のつながり——を根拠にして、復讐を果そうとしているからである。

## 5. オールバニ公爵

オールバニ公爵の登場する場面は限定されており、劇中でのその存在感はあまり大きくないとされる。FテキストとQテキストの異同に関するもので注目されることがあるのは、

- ◎ QのSc.16で妻ゴネリルを詰問する公爵の台詞が、Fのそれにあたる場面(4.2)で大幅に削除されること、
- ◎ 軍の司令官として軍勢を率いる理由がQとFで異なること、
- ◎ この戯曲の最後の4行の台詞がQではオールバニ公爵に与えられるのに、Fではエドガーになること、

これら三つである。本論の流れとして、公爵がリアからコーンウォール公爵と二人で譲り受ける「王国」との関わりでいかなる言動をとるかを焦点にして論を進めたい。「王国」に関わるオールバニ公爵の台詞において、QからFへの修正には興味深いものがある。

### ・ オールバニ公爵と王国

オールバニ公爵がかつてのリアの王国、コーンウォール公爵が殺害されてからは自分が率いるはずの王国とどう関わっているか、QとFの異同を確認しつつ追ってみよう。公爵はQ,Sc.4, F,1.4の場面の最後に妻のゴネリルとリアが対立し、リアがゴネリルのもとから立ち去るのを見届ける。その次のさらに次の場面で、QとFの両テキスト共通であるが、王国の後継者となったオールバニとコーンウォール、両公爵の間に戦争がおきるかもしれない‘Have you heard of no likely wars towards twixt the Dukes of Cornwall and Albany’ (Q,Sc.6,10~11, F,2.1,10~11) という噂が流れる。ただしこれは噂だけにとどまり、この後で新たな展開はない。わずかに、変装したケント伯が‘this enormous state’ (Q,Sc.7,162, F,2.2,152) [乱れたこの「国」または「状態」] という台詞を用いて国内の状況に言及するだけで、その中に両公爵間の争いなどが含まれるのか、具体的内容は明らかにならない。ただ、リアの王国を引き継いだはずの二人の公爵が、どちらも王国全体を掌握し統治している暗示はない。

その後しばらく間をおいて公爵が次に登場するのは、QでSc.16、Fでは4.2になってからで、版本によっては「オールバニ公爵の宮殿の前」と説明が付く場面であり<sup>34)</sup>、戦闘が間近に差し迫っている。すでにコーンウォール公爵は死亡しているので、戦闘で司令官となるはずのオールバニ公爵の意向がどうなのか、明らかになるべき場面である。ところがその場の最初に公爵は姿を現さず、ゴネリルの召使オズワルドから、公爵は迫る軍勢の情報を聞いても積極的な反応は見せない、との報告が入る。しかしその直後、公爵はその場に登場するやいなや、リアを狂気に追いやったとして妻ゴネリルに対して毅然とした態度を示し始める<sup>35)</sup>。反発したゴネリルはその場を去り、残った公爵はグロスター伯が両眼をえぐり取られたと聞いて、その経緯を詳しく問いただす。その蛮行の実行者がコーンウォール公爵であり、その公爵がその場で召使に殺されたこと、グロスター伯がそこまで追い詰められたのは、伯自身の息子エドモンドが密告したためであることを知

る。すると公爵は、「よしグロスター、この上は王に尽くしてくれたお前の忠義を忘れず、お前の両の目の仇を討って[復讐して]やるぞ (Gloucester, I live /To thank thee for the love thou showed'st the King, /And to revenge thine eyes)」(Sc.16,93~6, F,4.2,63~5) (大場訳)と宣言する<sup>36)</sup>。

観客はオールバニ公爵が復讐の覚悟を決める、その場面を目の当たりにする。リアの身を守ろうとしたグロスター伯の両眼喪失の事実を聞き届けた公爵による「復讐 (revenge)」の決意表明である。しかしよく考えてみれば、グロスター受難の原因となる密告をしたのはエドモンドであり、両眼をえぐり取った実行犯はコーンウォール公爵である。しかもそれらの事実を公爵はその場で知らされる。実行犯のコーンウォール公爵はすでに命を落としているが、エドモンドは直前までゴネリルとともに公爵の目の前にいた。では、オールバニ公爵が復讐を果すには、立ち向かうべきその相手は誰か？ いったい誰に復讐をするのか。素直に考えればそれはエドモンドと死んだコーンウォール公爵であろう。だが、ここで公爵は復讐の相手が誰かを明言しない。公爵の立場は非常に不安定である<sup>37)</sup>。

続く場面でQとFの間の大きな修正が注目される。Qのひとつの場面、すなわちSc.17の全体がFで削除されるからである。

⑮ Q Sc.17

F --- [QのSc.17にあたる場面全体が削除されて存在しない]  
QにおけるこのSc.17の機能は、ケント伯と紳士の二人が登場して、フランス国王の緊急帰国、および「オールバニ公爵とコーンウォール公爵の軍勢 (Of Albany's and Cornwall's powers)」が進軍している (they are afoot) との情報に報告者の口から明かされることである。コーンウォール公爵はすでに死亡しているので、その死亡の情報がこの報告者に届いていなかったことになる。

本論 (1) で確認したとおり、Fにこれに該当する場面がなく、Fでフランス王国軍が来ていない、あるいは、来ていないようにしようとする改訂の意図が明らかになるテキスト上の大きな変更である。この場面がFに存



在しないことにより、王国対王国が戦闘で対峙するという国際紛争の構図がFには見られないことになろう。

QのSc.17で言及される「オールバニとコーンウォルの軍勢」という台詞は、その台詞の含まれる場面全体がFにおいて削除されるため、Fには存在しない。Fにおいてオールバニが立ち上げる軍勢に関する言及は、次のコーディーリア再登場の場面4.3 (QのSc.18にあたる)に見出せる。その際の使者の報告は確かに「ブリテン軍 (the British powers)」である。使者が現れ、「ブリテン軍がこちらに行軍しています (The British powers are marching hitherward)」とコーディーリアに伝える。ただしQでもFでも、観客はこの時点でコーンウォル公爵の死を知っているため、その軍勢はオールバニ公爵が率いる軍と分かる。再登場したコーディーリアにはそれが‘The British powers’として伝わるのである。その中にエドマンドがグロスター伯の称号を名乗って軍を率いていることはのちになって (Q,Sc.20,241~2, F,4.5,238~9) 明らかになる。

コーディーリアに伝わった「ブリティシュ」というその語は、Fでは次の場面 (QでSc.20、Fで4.5) で修正される。すなわち、オズワルドの台詞が次のとおり修正されるからである (文中の‘him’はグロスター伯を名乗っていることがここで判明するエドマンドのこと)。

⑩ Q Oswald: Seek him out /Upon the British party. (Sc.20,241~2)

F Oswald: seek him out /Upon the English party. (4.5,238~9)

Qでは前の場面でコーディーリアに伝えられたとおり、確かに「ブリテン勢 (the British party)」のままであり、フランス王国軍が侵攻を進める戦況を背景に、オールバニ公爵とエドマンドの軍勢が「ブリティシュ」として言及される (後で判明するとおり、エドマンドの軍勢の兵士たちもオールバニ公爵が招集したものである)。しかしFでは、イングランドの軍勢 (the English party) と修正される。これ以降の場面にはQ、Fともに軍勢の性格を説明するための‘British’や‘English’などの言及はないから、やがて最終場の前の場面 (Q,Sc.23, F.5.2) で展開される戦闘は、Qにおいてはフランス

国王軍とブリテン軍という、王国の関わる国際紛争としての戦争である。それがFにおいてはコーディーリアの側もオールバニ公爵の側も、王国に関わるような戦闘ではなく、他国で后となった女性の率いる軍勢と、一人の公爵の率いる軍勢の戦闘、という暗示であろう。以上をまとめて図示すると次のようになる。

Q	‘ <u>Albany’s and Cornwall’s powers</u> ’ (Sc.17, 49)	‘The <u>British powers</u> ’ (Sc.18, 22)	‘Seek him out /Upon the <u>British party</u> ’ ( Sc.20, 241 ~ 2)
F	対応場面なし	‘The <u>British powers</u> ’ (IV. iii , 21)	‘seek him out /Upon the <u>English party</u> ’ (IV. v, 238 ~ 9)

こうして両軍勢の内実が明らかにされ、QでSc.22、Fで5.1になると最終的に対峙する両軍の詳細が確認され、戦闘を目前に控えて緊迫した状況がその場を支配している。この場面の冒頭には、公爵が戦う決意をする前の段階でどう振舞っていたか、興味深い事実が語られる。エドモンドが言うには、

⑰ Q he’s full of abdication /And self-reproving (Sc.22,3~4)

「[公爵は]自分の立場を放棄したが、自責の念にかられている」

F he’s full of alteration /And self-reproving (5.1,3~4)

「[公爵は] ころころと心変わりして、自責の念にかられている。」

Qでは、公爵は自分の立場から逃れたがっている (full of abdication)。その立場とは、自分がエドモンドとともに‘British’と呼ばれる軍隊を率いて、フランス国王軍と戦う司令官としての立場である。Qで用いられる‘abdication’は王が退位することの含みがあり、Qのオールバニ公爵が一国の王に近い立場になってためらっていることが暗示されるだろう。他方でFでは、自分の軍を率いるのかどうか、あるいはどう行動すべきか、迷いに迷っている (full of alteration) ということである。公爵が王国をどうするつもり

なのか、ここに言及はない。

しかし、この直後に実際に舞台上に登場したオールバニ公爵は決意を固めた様子であり、その姿には自分の立場から逃れるとか (Qの場合)、行動方針に逡巡するとか (Fの場合)、直前に報告されたような様子は見られない<sup>38)</sup>。召集した軍の司令官として、進んで戦闘に赴こうとしている。その場で公爵が認識し決意して述べる内容をQとFそれぞれにまとめると次のとおりで、Qにある四つの内容のうち、Fでは二つが削除される。

- ⑱ Q ① The King is come to his daughter.  
(リアがコーディーリアと合流したこと)
- ② With others whom the rigour of our state /Forced to cry out  
(国内で声をあげた人々も一緒であること)
- ③ It touches us as France invades our land;  
(フランス王のわが国土への侵略は自分に関わる)
- ④ Most just and heavy causes make oppose.  
(リアは正当で重大な大義名分で対抗している)
- F ① リアがコーディーリアと合流したこと
- ② 国内で声をあげた人々も一緒であること
- ③ --- (Fで削除) ---
- ④ --- (Fで削除) ---

Qの公爵はこれから戦闘を交える相手がフランス王国軍であり、その戦闘は別の王国の侵略を迎え撃つ戦闘であるとの認識を示すことによって、自分は国土 (our land) を守るという立派な理由があると明言する。ところが、同じ場面にあたるFの公爵の認識には、Qにあったうちのフランス王の侵略とリアの王位に関する二つの内容が削除される。リアとコーディーリアが一緒にいる「声をあげた (cry out)」人々とは、「反乱」を起こした人々を暗示するであろう。

このとおり、Qの公爵の台詞から一部が削除されてFの台詞となっており、結果としてFの公爵は、フランス王国軍の侵略にも、リアの王位の正当性

にも、どちらにも言及しない。Qで公爵は、たとえリアがコーディーリアのいるフランス王国軍と合流しそこで保護されているとしても、その軍は自分の国土 (our land) を侵略する (invade) のであるから、その侵略軍を相手に自分は自分の軍を率いて戦う、と決意を表明する。ところがFの公爵がもつ敵軍に関する情報は、その中にコーディーリアとリアがいて、反乱を起こした人々も合流して一緒にいることだけである<sup>39)</sup>。フランス王国軍の侵略としては言及されず、リアの王位に関する公爵の認識も表明されない。対外的な国際関係の中で重要性を帯びるはずの「国土 (our land)」の意識が消去されるとともに、王位の正当性に関する言及も削除される。Fにおける、「国」意識の消失の一例であろう。

こうして、Qのオールバニ公爵はフランス王国軍との戦いにそなえて固い決意を示すが、他方Fにおいてフランス王国軍が来ていないとすれば、Fにおけるオールバニ公爵の戦う決意はどういう理由によるのか？ Urkowitzは「F版のオールバニは戦うべき自分自身の論理的、道徳的正当化を明言しない。ただ、公爵の疑問などを「問題外」とするゴネリルの決め付けに依拠しているだけ」と説明する<sup>40)</sup>。Fの5幕1場になっても、公爵は妻ゴネリルに振り回されているだけ、という解釈である。

これに対して、別の考え方もあるだろう。先に述べたとおりQのSc.16における公爵とゴネリルの口論の場面で、Qの公爵が妻に向けて発する攻撃的な表現の数々がある。しかし、Fの同じ場面にあたる4幕2場でそれらの表現が大幅に削除される。Fの公爵は、妻ゴネリルの強引な態度に引きずられて依拠しているだけ (Urkowitzの説明) ではなく、妻に対して一定の配慮を示していることにならないか。この場面 (F,4.2) で公爵は、妻と自分の関係を考慮して妻ゴネリルの意志に配慮したということである。Qテキストにおいて侵攻するフランス王国と自分の国土 (our land) との関係が表に出ているのに対して、Fにおいては、その国際関係の影は背景に退いて、妻ゴネリルに配慮を示す夫婦関係の中で内乱に立ち向かおうとする公爵の姿が描かれることになるだろう。

## 王国の承継

オールバニ公爵が注目される第2の点は、この戯曲の最後の台詞の話手になるかどうかである(台詞の内容は同一)<sup>41)</sup>。

⑱ Q Duke : … (Qで最後の二つの台詞のスピーチヘッディングはAlbanyでなく *Duke*)

F EDGAR : …

Qで公爵が引き受ける台詞が、Fにおいてエドガーの台詞に修正される。シェイクスピアの悲劇や歴史劇において、最後に幕がおきる直前、それまで混乱していた状態に終止符が打たれ、やがて続くだろう世界がいかなるものになるか、暗示となる人物が残るのが通例である<sup>42)</sup>。たとえば『ハムレット』におけるフォートインブラス、『マクベス』におけるマルコム、『リチャード三世』におけるリッチモンドなどが思い浮かぶ。

リア王物語の場合にもこれが当てはまるだろうが、その役がQではオールバニ公爵であるのに、Fではエドガーである。幕引きの最後の4行の台詞の話者が代わるわけであるが、最後の場面(Q, Sc.24, F.5.3)における王国についての意識を追ってみよう。

オールバニ公爵は戦闘が終わって戦場から引き上げてきたところで、QでもFでも自分が軍の司令官として行動したと自覚している。公爵はエドマンドに向かって、‘Sir, by your patience, /I hold you but a subject of this war, /Not as a brother.’ (Q, Sc.24, 58~60, F.5.3, 53~55)と告げて、エドマンドが自分と対等な身分でなく自分の配下にあると断言する。さらに、エドガーとエドマンドの決闘の直前には、エドマンドに向かって‘thy soldiers, /All levied in my name’ (Q, Sc.24, 101~2, F.5.3, 96~7)として、自軍の兵士達はすべて自分の名において召集されたことを明らかにする。これらはQ、Fで共通であり、オールバニ公爵は「王国」について言及しないものの、少なくとも軍の最高司令官として戦闘に臨んだのである。

その後エドマンドとエドガーの決闘があり、リーガンとゴネリルが相次いで命を落とし、ケントが登場したあと、すでに息絶えたコーディーリア

を抱いてリアが登場する。そこからオールバニ公爵は戦闘後の自覚を明確に述べ、それ以後の「王国」をどうするか二回にわたり言明する。一回目には、リアが生存している間は「自分の絶対権力」(our absolute power)をリアに譲ると宣言する。重要なのはこの台詞の前提である。オールバニはここでいわゆる‘royal we’を用いて自分がすでに一国の王に相当する立場にあると暗に表明し、それによって「絶対権力」が自分の手中にあるとの前提で話している。その前提で、リアが存命中はその権力をリアに譲る、というのである。ところが、その途端にリアが息を引取る。するとオールバニは二回目の宣言として、ケント伯とエドガーに向かって命令文の形で、

⑳ Q Rule in this kingdom and the gored state sustain. (Sc.24,315)

F Rule in this realm and the gored state sustain. (5.3,294)

と伝える。

ひとつ単語のみの修正があるが、Fの‘realm’もQの‘kingdom’と同じ意味であると理解されている。ところが、QとFでこの1行の意味はまったく異なる。Qの場合は、そのすぐ後でオールバニ公爵は最後の4行を述べて自分の決意で芝居の全体を締めくくるのであるから、自分が手にした「絶対権力」をリアの死後に握り続けて国を統治することになるであろう。㉑の1行は、ケント伯とエドガーに向けて自分の統治において二人に協力を依頼するものである。しかしFの場合は、その1行は自分がその「絶対権力」を放棄し、ケント伯とエドガーに譲り統治を依頼する1行になる。ケントはその依頼を断り、エドガーは依頼を引き受けて最後の4行を述べ、今後の国の舵取りをするであろうと暗示される。

以上、本論(1)、(2)において、QテキストとFテキストに関して、プロットおよびテキスト(台詞、ト書き)における異同という形式上の明白な違いに焦点を当てて考察を試みた。(1)では、Qで見られるフランス軍に言及する文言がFにおいてほぼ一貫して削除されることから、Fではフランス軍が侵攻していない、あるいは侵攻しないことにする意図が明らかであ

ることを確認できたと思われる。さらに (2) では、「王国」や「国」に関わる登場人物の台詞やト書きがQテキストとFテキストで異なり、Fテキストにおける「王国」や「国」意識の消失とみなされることが確認できたと思われる。いわば、Qテキストから何が削除されているか、形式上の引き算を確認したことになるだろう。ではそれらの引き算後、Fテキストとして成立した『リア王の悲劇』はいかなる作品として理解すべきか、次回 (3) で考察を続けたい。

(3) に続く。

## 注

- \* 日本語訳については、大場建治編『リア王』（研究社、2005年）を使わせていただいた場合があり、その都度注記いたしました。
- 1) 使用テキストについては、本論 (1) に続いて本文に言及する場合はQテキスト、Fテキストそれぞれ次による。  
Stanley Wells (ed.), *The History of King Lear*, Oxford University Press, 2000.  
Jay L. Halio (ed.), *The Tragedy of King Lear*, Cambridge University Press, 1992.
  - 2) テキストで‘war’が用いられるのはF、Qどちらのテキストでも3回のみである。最初はCuranという人物が二人の公爵の間に‘war’が起こりそうだというわさを口にする (Q, Sc.6.10, F, 2.1.10)。これは明らかに「内戦」を意味するであろう。第2の例はオールバニ公爵の台詞で、これから始まろうとする戦闘に言及し、Qでは‘the ensign of war’、Fでは‘th’ancient of war’である。第3の例は公爵がエドマンドを自分の部下だと述べるくだりでQ、Fともに‘a subject of this war’である。
  - 3) シェイクスピアのこれら二つの戯曲のようなヨーロッパ中世に設定されたと思われる物語を考察する場合において、そもそも「中世に国家が存在したか否かという問題」がある (堀米庸三『ヨーロッパ中世世界の構造』(岩波書店、1976年)、p.3)。同著者はまた、「実際中世国家は考えうる限り統一性の弱い国家であった。そこには国土または国境という観念をさえ発生せしめる根拠が欠けていたのである」(同書、p.76)とも述べる。
  - 4) Wells, *op.cit.*, p.33がシェイクスピアはこの戯曲において‘delocalization’の手法を用いていると指摘するとおり、具体的な地名はイングランドでフランスに一番近い場所と考えられた‘Dover’のみであり、その他は実際場面がどこかなどは曖昧である。大場建治編『リア王』（上掲書、p. [2]）もやはり‘The Persons of the Play’として登場人物一覧表を示し、‘Lear’の項目には‘King of Britain’と付け加える。ページ下の注釈として‘Britain’は「古代ブリタニア王国」であり、リアは「Geoffrey of MonmouthによればBritain 10代目の国王で紀元前9世紀から8世紀にかけての人物とされる」とする。シェイクスピアが材源のひとつにしたとされるジェフリー・オブ・モンマス『ブリテン列王史』に言及したものである。その書はリア王物語のイングランドにおける源泉で、1135年頃の作 (Geoffrey Bullough (ed), *Narrative*

*and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol.VII, (London, 1973, p.272)とされ、作者ジェフリー・オブ・モンマス (1100?~1155)は12世紀前半期の人物であった。「古代ブリタニア王国」はジェフリー・オブ・モンマスが紀元前8世紀にさかのぼる王国として生み出した想像上の王国であり、グレートブリテン島の全体を支配した王国とされる。しかしそもそもグレートブリテン島はそこまでさかのぼる歴史時代をもたない。シェイクスピアのリアの物語をその「古代ブリタニアの王」とみなし、古代ローマ時代にさかのぼる歴史時代に設定して考察することは不可能である。ジェフリー・オブ・モンマスのリア王の物語が中世ヨーロッパの想像文学に属する限りにおいて、ヨーロッパ中世の記録に残る国王や封建諸侯の歴史物語の方がリアの物語に関連があることは明らかであろう。

- 5) この場面の登場人物たちの言葉遣いからは、あたかもリアの王国が国王であるリアの所有する財産のひとつであるかのような印象を受ける。社会学においてマックス・ウェーバーの用いた‘Patrimonialstaat’ (家産制国家)の概念がちょうど当てはまるように思われる。堀米庸三「マックス・ウェーバーにおける前近代的支配——封建制と家産制——」(前掲『ヨーロッパ中世世界の構造』所収、pp.102~121)を参照させていただいた。
- 6) シェイクスピアが材源のひとつとしたのが *The True Chronicle History of King Leir* である(‘Leir’の発音は‘Lear’と同じ [liə]とされる(大場、前掲書p.[2])が、日本語では通称「レア」が用いられる(ジェイムズ・シャピロ『リア王の時代』(白水社、2018年)、p.76参照)。この中では、これら二人の公爵にあたる人物はどちらも「王」と呼ばれ、「カンブリア王 (the King of Cambria)」と「コーンウォル王 (the King of Cornwall)」である。「カンブリア」は今日のウェールズにあたる地域であり、「コーンウォル」は10世紀にアングロサクソンの支配下に入るまで一つの王国であった。14世紀エドワード三世(1327~77)の時代以来、ウェールズの王子(the Prince of Wales)は常にコーンウォル公爵であったので、これら二つの地域は一人の貴族のもとに統合されていた。シェイクスピアはそのコーンウォルの名称を用いるが、称号は「王」ではなく「公爵」としている。*King Leir*に登場するもう一人の王である「カンブリア王」の代わりに、シェイクスピアでは「オールバニ公爵」が登場する。「オールバニ」はスコットランドに相当する地域の呼称であった(Gary Taylor and Michael Warren (eds), *Division of the Kingdoms*, (Oxford University Press, 1983), p.vi)。Foakes編のテキストの注にも同じ説明がある(R.A.Foakes (ed.), *King Lear* (The Arden Shakespeare, 1997), p.163)。シェイクスピアの物語でも、開幕冒頭で上の二人の娘達はすでに結婚していて、上の娘の夫がオールバニ公爵、次女はコーンウォル公爵である。封建社会のあり方から考慮すれば、二人の公爵は封建領主としてそれぞれ独自の所領を、一方はオールバニ(今日のスコットランド)に、もう一方はウェールズとコーンウォルに持つことが暗示される。王であるリアも同時にまた封建領主の一人として自分の所領を持ち、暗示としては今日のイングランドにあたる地域の領主と想定されるが、これらのことは劇中ではまったく触れられない(‘English’という語は一回だけ用いられる)。リアと二人の公爵との関係は、王であるリアが公爵たちに対して封建関係において上位であり、臣従の関係にあると考えられる。封建時代のこのような関係について、「封



建関係は純然たる個人間の関係なのである、、、とされる (堀米庸三『中世の光と影 (下)』(講談社学術文庫、1978)、p.83)。さらに、二人はリアの娘婿にあたり、Fではリアが‘Our son of Cornwall, /And you, our no less loving son of Albany’と呼びかける。これはリアの台詞であるが、Fのみの台詞。Fではリアと二人との姻戚関係がこのように台詞で明確に表明される。

- 7) テキストからの引用は以後このように引用順に①～として順番を付し、QとFを併記。QとFで異同がある場合は下線で表わす。

- 8) 上掲 *The Division of the Kingdoms*, (pp.v ~ vi.) この書にも掲載されているが、‘kingdom’のOEDの定義は次のとおり。‘Kingly function, authority, or power; sovereignty, supreme rule; the position or rank of a king, kingship.’

同書が提示するもう一つの読み方は、‘proleptical’ (予期的品辞法) という難解な修辞学用語を用いて説明される。グロスター伯が複数形で‘kingdoms’を用いるのは、王国分割後の結果として複数の‘kingdoms’になることを表わす、というものである。

- 9) リアの王国が「ブリテン王国」だとしても、それが今日のグレートブリテン島の全体に及ぶものかどうか、あるいはイングランドやもっと狭い範囲に限定されるのか、これはQにせよFにせよ、戯曲の中では明らかでない。リア王の物語を含む12世紀に成立したジェフリー・オブ・モンマスの『ブリテン列王史』(大場、上掲書p.xxxi) が注目されたのは、ずっと時代が下って15世紀にイングランドの支配者となったテューダー王朝の始祖ヘンリー七世 (在位1485~1509) が、「テューダー王朝がブリテンの先祖 (the British ancestry) とどう連なるかを調査するよう指示した」ことが契機であった (Bullough, *op.cit.*, p.272)。

モンマスの「歴史書」とされるものの実態は、1066年のノルマン人によるイングランド征服の後に生み出された想像文学であった。Everyman’s Library 版の序論によれば、ブリテンという土地がその背後に紀元前の古代ローマの頃にまでさかのぼる由緒ある歴史を持つ土地である、というフィクションを作り上げたのである。作者ジェフリー・オブ・モンマスは、そのフィクション物語を支えるフィクションも提供した。オックスフォードのアーチディーコン (‘archdeacon’ 司教補佐職の名称) で、ウォルターという名の人物による‘British language’で書かれた一冊の書が存在し、その書物を作ったモンマスが入手したというのである。以上 Gwyn Jones, *Introduction to Everyman’s Library edition of History of the Kings of Britain* (Everyman’s Library, 1963), pp. vii ~ ix による。

- 10) ‘quality’の意味は、個人的な「資質」と訳す例 (大場、前掲書) があり、その意味だとしたら、個人の資質を評価された両公爵はその判断をめぐってお互いに紛糾することだろう。後に二人の間に紛争が生じることが暗示されるが、直接の原因は不明である。その紛争もコーンウォール公爵が途中で死んでしまうため噂だけにとどまる。
- 11) Qテキスト編者Wellsの注による。Wells, *op.cit.*, p.100.
- 12) この‘dark’の意味を Alexander Schmidt, *Shakespeare Lexicon* は‘not known’としている。Wellsの注 (*op.cit.*, p.102) はこの‘darker’について、‘more secret, inward’と説明する。

- 13) Wells, *op.cit.*, p.102.その他に‘will’と‘shall’の違いがあるが、‘will’は話者の意志、‘shall’はその意志が強められるだろう。Schmidt, *Lexicon*では‘shall’の項に‘inevitability’を表わすとの説明がある。
- 14) Qの‘first’について。これは‘fast’がもとの、つまり作者の意図した語で、‘first’となったのはQの印刷段階の植字工などによる単なる「エラー」とみなし、それがFで‘fast’に正しく修正された、という見方もある (Halio, *op.cit.*, p.73)。しかし意図的な修正としてもその文章は問題なく解釈が可能である。
- 15) フォリオ版のp.791を参照。Norton Facsimilie Edition, *The Norton Facsimile, The First Folio of Shakespeare*, prepared by Charlton Hinman, New York, W.W.Norton & Company, Inc. 1968.
- 16) 大場、前掲書、p.10. “‘Confirming’ [=legally establishing] ”による。
- 17) ‘dominion’はOEDによると、‘The territory owned by or subject to a king or ruler’あるいは‘The lands or domains of a feudal lord’とあり、領土(テリトリー)の側面も含む。
- 18) ケントは実は「ケイアス(又はカイアス)‘Caius’」と名前を変えることになっている。しかしその事実はこの場面で観客に明かされず、この戯曲の最後の最後になってから判明する (Q,Sc.24, 278, F,5.3, 257)。
- 19) その「王国」が地理的にどこからどこまでの範囲に及ぶのか、そのような境界線は確定不可能である。王国の意識はあるものの、その「領土」には明確さが無い。
- 20) これは法に基づく執行とは言えないものであり、私人の行為がそのまま王権の行使となるのである。リアの王国は今日のような近代的な意味での国家による法整備がない社会体制にあることが明らかである。
- 21) Stanley Wellsの注による。‘excessively disordered, wildly irregular state of things, or country’ Wells, *op.cit.*, p.161.
- 22) Wells, *op.cit.*, p.149. Schmidt, *Shakespeare Lexicon*にもこれら二つの意味があると説明がある。
- 23) グロスター伯は後にリアも‘the King my master’ (Q,Sc.13,79, F,3.6.42)と呼び、リアをドーヴァーに送り届けるよう自分の配下の騎士たち (his knights)に指示したと報告される (Q,Sc.14,13~16, F,3.7.15~18)。そうするとグロスター伯とコーンウォール公の関係は、非常に緊張をはらむ危険なものとなる。グロスター伯がリアのために尽くせば、その行為はコーンウォール公にとって自分に対する誠実の義務の違反、自分でいう「裏切り」と映るのであろう。グロスター伯がリアとコーンウォール両者ともに主人 (master)と呼び、二人の間に引き裂かれた立場にあることは明らかである。結局はリアの身柄をかくまって逃亡を助けたように見えることになり、公爵の残虐な行為に火をつけることになる。

コーンウォール公爵は自分の残虐行為をグロスター伯への復讐 (revenge) であると二度も繰り返して強調し正当化する。グロスター伯は公爵に対して臣従関係にある者として何らかの義務を負うからであろう。その義務に違反したグロスター伯は復讐の対象になるとみなされるらしい。

ただ、グロスター伯が行う公爵の権威に基づくその手配が「王国全体」におよぶ効力があると宣言しても、ヨーロッパ中世の封建制を背景にしていると考えられるこの物語にあって、国王、公爵やその他の領主たちの所領を越えて領土をも

- つ統一的な権力があつたとの想定は無理があるだろう。そういうコーンウォール公爵の地位や権限と国王との関係は、この戯曲内では明確になっていない
- 24) 「セント・メアリ・オブ・ベツレヘムのホスピタルとして設立されたベツレヘムは、中世後期・近世におけるイギリスの中心的な精神異常者の施設であった。そこから、トム・オベドラムという言葉が生まれたのである」。「トム・オベドラムの人びとか、彼らを真似ている者たちは、浮浪者として逮捕された。許可の与えられていない乞食が浮浪者として扱われる法的条件は、健全な者だけでなく精神異常者にもおよんだ」。A・L・バイアー 『浮浪者たちの世界——シェイクスピア時代の貧困問題』(佐藤清隆訳、同文館、1997年)、p.205, p.207. なおQの編者WellsはQで‘them of Bedlam’ (Sc.2, 126~7) とあるのはFにある‘Tom of Bedlam’の間違い (error) であろう、としている (Wells, *op.cit.*, p.122). なお *Encyclopedia Americana* によると、Saint Mary of Bethlehem は1247年に設立された教会付属の小修道院 (priory) であり、早くも1402年には精神異常者用施設 ‘a hospital for the insane’ として用いられた、という。
- 25) ここで用いられる ‘The country’ が具体的に何を指示するかは曖昧であろう。翻訳では「国」が用いられるのが通例であるが、「Bedlam は (Hospital of St Mary of) Bethlehem [béθlihem] の崩れた形で、ロンドンの Bishopsgate にあつた精神病院の名前」(大場、前掲書、p.47) であるとすれば、‘The country’ は狭くはロンドン市を指すか、またはイングランドかもしれない。だがウェールズやスコットランドを含むブリテン島全体でないことは確かであろう。
- なおベツレヘム・ホスピタルは、バイアーの上掲書の訳注、p.358によると、「1546年にはロンドン市からの請願によって市当局に譲渡され、10年間、住み込みの管理人を通じて、市参事会が直接取り締まった」とある。
- 26) ただしコーディネーリアの場合は「追放」ではなく、「わしはここに父たるの保護を一切断つ、／縁も血もこれとはなんのつながりもない」(大場訳) とリアから申し渡されるだけである。A.C.Bradley はコーディネーリアも「拒絶され追放された (rejected and banished)」として、実質的に追放と同じとしている。A.C.Bradley, *Shakespearean Tragedy* (Macmillan, 1971) , p.265.
- 27) なお、この台詞の原形の動詞 ‘I go about’ は、現代では ‘I am going about’ と現在進行形を用いて、「私が現在従事している～」と言い表すだろう意味で用いられる。シェイクスピアにはこのような用例が見られる。
- 28) Halio の注による。‘Here, she is at the head of an army.’ Halio, *op.cit.*, p.212.
- 29) 大場、前掲書 p.329. 大場はここでQとFのコーディネーリア像は異なることを述べ、「F1とQ1の conflation の無謀はここに極まると言うべきである」と付け加える。
- 30) 大場、前掲書 p.274の注による。
- 31) Steven Urkowitz, *Shakespeare’s Revision of ‘King Lear’* (Princeton University Press, 1980) , p.107.
- 32) 例えば、‘Cordelia seems to lead not an invasion but a rebellion...’, Gary Taylor, ‘The War in *King Lear*’ (*Shakespeare Survey*, 33) , p.31, ‘Consistent with the Folio text of 3.1, there is no connotation of invasion at this point in the Folio. Rebellion is suggested instead.’ Urkowitz, *op.cit.*, p.73.

- 33) 「ほとんど中世を一貫して、とりわけ封建時代には、人々は、私的復讐のしるしの下に生きていた。もちろん私的復讐は、最も神聖な義務として、まず第一に被害者個人の責任であった。・・・しかしながら個人は、自分ひとりでは、ほとんど何もできなかった。その上、多くの場合、贖う必要のあったのは、ほかならぬ死であったのだ。そこで家族集団が戦列に加わることとなり、《フェーデ》*faide* が生れたのである。この語は古いゲルマン語で、当時次第にヨーロッパ全体に普及していったものである。たとえば、ドイツのある教会法学者は、《わが国の言葉でフェーデという、血縁者による復讐》と述べている。どんな道徳的義務でも、これ以上に神聖なものとはみなされなかった」(マルク・ブロック『封建社会』(岩波書店、1995)、pp.162~3)。
- コーディーリアがリアの正気喪失をいつ知るかが問題になるかもしれないが、それについては劇中に暗示はない。しかしすでに確認したとおり、ケント伯とコーディーリアは情報を交換していることになっている。
- 34) Kenneth Muir (ed), *King Lear*, (Methuen, 1972), p.143.
- 35) ここにはQとFに大きな違いがあり、Qで公爵は激しい言葉を用いて妻を罵倒し、その中にはよく知られる台詞が含まれる。ところが、それらの台詞のほとんどがFで削除されることが注目される。
- 36) ここでオールバニ公爵がグロスター伯の行為を指して用いる‘love’については、訳はさまざまで、ここにあげた「忠誠」と同類の単語では「忠勤の礼」、「真心」、「忠義の真心」などがある。ただし‘love’には明示的にはそういう意味がないことに注意すべきであろう。「愛」、「愛情」とする翻訳もある。
- 37) 盲目のグロスター伯爵の場合もまた、正気を失ったリアと同じように復讐を実行すべき当事者能力に欠けるわけで、オールバニ公爵がここで復讐を代行すると宣言するが、オールバニとグロスターは近親者ではないので不思議な感を与える。ちなみにこの戯曲中で「復讐」という語は慎重に使われており、次の四例だけである。すなわち、
- ◎リアがゴネリルとリーガンに復讐を誓うとき (Q,Sc7,437, F,2.4, 272)
  - ◎リアの受ける難儀 (injuries) は復讐されるだろうとグロスター伯が案じるとき (Q,Sc.10,12, F,3.3,11)、
  - ◎コーンウォル公爵がグロスター伯を裏切り者と決め付けて復讐を誓うとき (Q,Sc.12.1, F,3.5,1)、および (Q,Sc.14.5, F,3.7,7) の二回、
  - ◎オールバニ公爵がリアに忠義を尽くしたグロスター伯の両眼喪失に復讐を誓うとき (Q,Sc.16,96, F,5.2.65)。
- 事実上三つの案件であるが、自分が受けたと認識する不正義に自分で復讐を実行するのはコーンウォル公爵だけで、リアの復讐は娘のコーディーリアが、グロスター伯の復讐は息子のエドガーが代行する。
- 38) Urkowitzは、決断の際の現場を観客に見せないことがある、と指摘し、Maynard Mackを引用しながら、‘one of the distinguishing characteristics of the dramaturgy of *King Lear*’であると述べる。Urkowitz, *op. cit.*, p.100.
- 39) そうすると、かつてはれっきとした国王であったリアのいる軍勢と対峙するのであるから、自分の側がいわゆる賊軍となる可能性もある。もしオールバニ公爵が

戦闘に敗北すれば必ずそうなるだろう。

- 40) Urkowitz, *op.cit.*, p.101.ゴネリルのその台詞は、‘For these domestic poor particulars / Are not to question here.’
- 41) なお、1608年として出版年が記載されるQテキストにおいて、オールバニ公爵の最後の二つの台詞の speech heading のみ ‘Duke’ と表記される。*The Facsimile Edition of Shakespeare’s Quarto of King Lear* (Meisei University, 1976) による。
- 42) 「当時の歴史劇には、最も身分のある者が最後の言葉を言うという約束があった」という指摘がある (シャピロ、前掲書、p.72.) ただし、Fのエドガーが最後で「最も身分がある」とすれば、直前にオールバニ公爵から王位を譲られてそうなるわけであろう。

## 引用文献

- 大場建治編 『リア王』、研究社、2005年  
シャピロ、ジェイムズ (河合祥一郎訳) 『リア王の時代』白水社、2018年  
バイアー、A・L (佐藤清隆訳) 『浮浪者たちの世界——シェイクスピア時代の貧困問題』同文館、1997年  
ブロック、マルク 『封建社会』岩波書店、1995年  
堀米庸三 『ヨーロッパ中世世界の構造』岩波書店、1976年  
堀米庸三 「マックス・ウェーバーにおける前近代的支配——封建制と家産制——」、前掲 『ヨーロッパ中世世界の構造』所収、pp.102~121.  
堀米庸三 『中世の光と影 (下)』講談社学術文庫、1978年  
Encyclopedia Americana, Americana Corporation.  
Schmidt, Alexander, *Shakespeare Lexicon*, Dover Publications, Inc. 1971.  
Norton Facsimilie Edition of *The First Folio of Shakespeare*, prepared by Charlton Hinman, New York, W.W.Norton & Company, Inc. 1968.  
*The Facsimile Edition of Shakespeare’s Quarto of King Lear*, Meisei University, 1976.  
Muir, Kenneth (ed), *King Lear*, Methuen, 1972.  
Hailo, Jay L., (ed), *The Tragedy of King Lear*, Cambridge University Press, 1992.  
Wells, Stanley (ed.) *The History of King Lear*, Oxford University Press, 2000.  
Bradley, A.C., *Shakespearean Tragedy*, Macmillan, 1971.  
Bullough, Geoffrey (ed), *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol.VII, London, 1973.  
Jones, Gwyn, Introduction to Everyman’s Library edition of *History of the Kings of Britain*, Everyman’s Library, 1963.  
Taylor, Gary, ‘The War in *King Lear*,’ in Kenneth Muir (ed.) *Shakespeare Survey*, 33. Cambridge University Press, 1980.  
Taylor, Gary, and Michael Warren (eds), *Division of the Kingdoms*, (Oxford University Press, 1983) , p.vi). R.A.Foakes (ed.), *King Lear* (The Arden Shakespeare, 1997),  
Urkowitz, Steven, *Shakespeare’s Revision of ‘King Lear’*, Princeton University Press, 1980.